隠国 KOMORIKU 通信 Vol. 7
The Letters From K.Kayamori in KOMORIKU.

合唱の魅力てんこ盛り！

2018.8.19

オーケストラは街の顔とよくいわれる。日本は大都市がさらに大都市となり、地方は人口が減少し、過疎化が進んでいる。情報化が進み、大都市型の商業的文化が地方にも広がり、その地域のありようを表す文化というものが姿を消してきているのかもしれない。それだけ生活が変化し、人々の意識も大きく変わったのであろう。

東京や大阪、京都、名古屋だけでなく、地域の顔としてのオーケストラが多く作られ、活動をしてきた。群馬、仙台、山形、札幌、九州（福岡）、広島、そして、金沢。それぞれの地域に根付き、地域に愛され、その地域を代表する「顔」となっている。

それでは合唱団はどうだろう。そもそも世界中を見渡してみても、プロの合唱団が、プロとして成立している例は数としてもそうあるわけでもなく、合唱というと本来アマチュアのものだと感じているから、「この街にはどんな合唱団があるのかな」と思ってしまう。合唱団といっても様々である。毎年定期的に演奏会を行い、コンクールなどにも挑戦していて、プロ顔負けのような難易度の高い曲を演奏しているところもあれば、地域の合唱祭や催し物で数曲を披露することをめざして集まっているところもある。歌う人がいれば、その演奏を楽しみに聴いてくれる人もいるし、お義理でもなんでもとにかく「聴いてみようか…」という近所の人や友達や、家族はいうまでもなく親戚なんかも動員して会場はにぎわう。そこで演奏がうまかったりしたら、「また聴かせてねー」とか「いやいや！すごいことやってるやん！」てなことになる。また、あまりうまくなくても、「頑張ってるなー、一生懸命やなー」という感じで、とにかく応援してくれたりする。

コンサートの会場で指揮をしてると背中でいろんなものを感じる。「今日のお客様は温かいなー」「集中して聴いてくれてるなー」とか…。イベント会場のような時には「ざわざわしていてやりにくいな　聴いてくれるんかなあ」というようなこともあったりである。でも、なんだか楽しんでいたり、一緒に口ずさんでいたり･･･。なんとか受け容れてくれてるんだろう。

合唱団は街の有り様を写す「鏡」だと思うことが多くある。人がどのように結びついていて、どんなふうに生活しているのかが合唱団に現れている。合唱団が、歌が、音楽が人と人とを結びつけ、あたたかいコミュニティに寄与できるならば、こんなうれしいことはない。

さて、岐阜の地にEnsemble Kiikaが産声を上げて６周年となる。たしか最初は７～８人でスタートした。練習が終わって県を二つまたいで自宅に帰るのだが、土曜日の夜に練習しているために、帰り着くと日付が変わってしまい、「岐阜は遠いなあ。」としみじみと思ったものだ。現在は、５分ほど早く終わらせていただいて、駅まで爆走し、さらに、名古屋駅で激走して１時間近く早く帰れる電車に乗っている。自分自身でも「よくやるなあ」とおもわはないでもないが、それ以上にメンバーの皆さんの「歌いたい」という気持ちや「この街でどんな歌声が広がっていくのだろうか」という期待でワクワクする。

今回のコンサートでは、京都府の最南部、奈良市と隣接している木津川市を拠点として活動をする合唱団Rinteをお招きした。合唱団Rinteは創団して２２年周年となった。団ができた頃は、まさかこんなに長くこの合唱団が続いていると考えていた人はいなかったかも知れないし、こんなに多くの仲間を得て活動しているとは考えられなかったかも知れない。創団当初からアカペラでの演奏を大切にしてきた。近年はアカペラでの演奏の頻度がどんどん上がってきて、今年の定期演奏会はオールアカペラプログラムで、大変好評をいただいた。よく響く声、豊かに響くハーモニー、美しい言葉、メロディなどをめざしていて、岐阜の地、しかもサラマンカホールで歌えるとあって、メンバー一同楽しみにしている。

林　光

今回のプログラムはヴァイオリンの松原さんにも入っていただいて、「ヴィヴァルディが見た日本の四季」と「うた」を演奏する。アカペラでの演奏となるラテン語のモテットである「三つのマリアの歌」、リリシズムあふれる三善晃の「麦藁帽子」と「林の中」、合唱団Rinteによるブルックナーのモテットとおなじみの「上を向いて歩こう」などの中村八大のヒット曲を混声合唱のアカペラで、そして、林光の作品！合唱の魅力てんこ盛りのようなコンサート！

岐阜は歴史と伝統、そして、文化あふれる街。この合唱がこの街の何を、どのように鏡に写すのか。考えるだけでワクワクする。

◆ご感想などは hane2883@gmail.com まで